

国語 I の古文

指導対象 生徒	第1学年 女子 積極的な発表はのぞめないが、ヒントなどを与えればよく考え、集中力はある。
教材	伊勢物語 第6段 「芥川」
教材の分析並びに構成	<p>1 「歌物語」という形式をもって形象化された平安時代の人々（男・物語の語り手、語り伝えた人々）の心を読みとらせたい。 前半：愛を貫徹しえたと思った瞬間、奈落の底につき落されたような男の絶望的悲しみ。 後半（後人注記と言われる的的分）：男の悲しみは、律令制社会のしくみの中から生みだされた、真実の姿であること。</p> <p>2 心情語を一切用いない叙述を、語・文法・敬語に依拠しつつ、想像させ、鑑賞させ、特に文法が鑑賞のための武器になることを、実感として感じさせたい。</p>
学習活動の展開	<ul style="list-style-type: none"> 音読（朗読→斉読）簡潔な表現の美しさを味わう。 登場人物を整理し、あらすじをつかむ。 古典語として特徴的な語・語法をとらえ、原文の深さを読み味わう。 <ul style="list-style-type: none"> 語（句）芥 ↔ 白玉，神，女御，下齋 語法 わたる（男の愛ののっぴきならないこと） をり（「居たりけり」と比較し「男」の心イコール「語り手」の心であること） なむ男に問ひかけり（係り結び、女のイメージ） 夜もふけにければ（悲劇の伏線） 食ひてけり（語り手の気持ち） はや夜も明なむ（男の願い） え聞かざりけり（不条理） 消えなましものを（屈折した心情） 敬語 “給ふ” “おはず”（男，女，兄人の身分，当時の社会体制） 歌に表現されている“男”の気持ちをまとめる。 蜻蛉日記の作者について（教師補説） ＜男の悲しみを生みだした律令社会に生きた女の例として＞
評価並びに生徒への定着のたしかめ	<p>1 登場人物（語り手、語り伝えた人々）の心が感じとれたか、またそれを的確に表現できたか。</p> <p>2 “男” “女” の人間像はつかめたか。</p> <p>3 助動詞、助詞、敬語の用法は理解できたか。</p> <p>4 上記1を確実なものにするため、書きまとめる（下記のようなプリントを配布）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>a は本文の表現である。b は類似の表現である。</p> <p>設問1 ・印の部分を文法的に説明せよ。</p> <p>設問2 bの表現と比較しつつ、言外に述べられている「男」の気持、語り手の気持ち、あるいは語り手が、読者に感じさせようとしたことを、想像して書きなさい。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 評価の1つに、感想文だけは、必ず書かせる。
留意点	<p>1 辞書にあたりつつ、重要語句の語感をつかませる。</p> <p>2 文法指導の場合は、その語の有無によって、内容がどのようにかわってくるのかを比較させ、のっぴきならない凝縮された表現であることに気づかせる。</p> <p>3 自分のことばで発表させる。</p>

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経て呼ばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに來けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先も多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡・胡・胡を負ひて戸口にをり。「はや夜も明けなむ。」と思ひつつゐたりけるに、鬼、はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て來し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と
答へて消えなましものを

後段落 (第六段)